

文学紀行を始めてみませんか？

歴史的とも言えそうな猛暑が続き、路上では体全体が熱風に包まれるようです。こんなときは、現役バリバリの方ならやむをえませんが、定年で時間が自由になる方には読書への取り組みをお勧めします。落ち着いた自分の部屋で、冷房のきいた図書館で・・・あるいは木陰に椅子かハンモックを持ち出して、なんてぜいたくもありえます。先日、多摩川の撮影に行ったところ、川辺で本を広げている男性に出会いました。「水音を聞きながら読んでると、心まで洗われるんです」と――。



もう半世紀以上も前になりますが、私の場合、たまたま中学・高校時代の担任が国語の先生で、いつも言われたものでした。「夏休みには大作を読みなさい。大作を！今は全部わからなくてもよいから。人生の深みを感じられるだろう。読み終えたら自分が少し偉くなったような気がするかもしれないよ」。そんな先生に感化されて、当時は難しかったシェクスピアやゲーテの作品にも取り組みました。難解だったけれど、たしかに少し偉くなったような気になったものです。

定年になった現在は、昔読んだ作品を読み直してはその舞台を訪ねています。5年前、『ドン・キホーテ』から始まった作品の舞台の旅は『風と共に去りぬ』『赤毛のアン』『ロミオとジュリエット』『ベニスの商人』と続き、今年は『ハムレット』の舞台デンマークのクロンボー城、そしてドイツでは高校時代に読んだゲーテやヘッセのゆかりの地を訪れました。その時のレポートや写真を先月更新のホームページにアップしたところです。

青春時代に胸ときめかせた小説の舞台に立つことは、何事にも代えがたい感慨があります。古希を前に、外国文学だけでなく、いつかは温泉地が舞台の『坊っちゃん』や『雪国』など日本の名作も、といった想いも温めているところです。もし外国文学の舞台を訪れるのに言葉の壁があるという方は、日本文学の作品に取り組むのも素晴らしいと思うのです。



夏休み明けには、読書感想文コンクールがあるからと、子供や孫たちに宿題が出ているかもしれません。その面倒をみる傍ら、自身が読みたい作品に取り組むのもよいのではないのでしょうか。必ずしも大作や古典でなくても、枯れかけた心にみずみずしいトキメキを与えてくれる恋愛小説も大賛成。エンターテインメント性の強い本もOK。本は人生の幅を広げ、心を柔らかくしてくれますよね。

今年は「国民読書年」。「すべて良き書物を読むことは、過去の最もすぐれた人々と会話をかわすようなものである」（デカルト）とも言われています。「晴耕雨読」転じて「暑読涼旅」なんて造語を編み出してみました。暑い夏に涼しい所で本を開き、読書の秋には作品の舞台への旅でその感慨をもう一步深めてみる――そんな文学紀行を始めてみませんか？